



スワンとカポーティ

中野香織(服飾史家/作家)



カポーティが残した数ある名作のなかでも、ひととき異彩を放って同時代の空気を立ち昇らせる作品は、「黒と白の舞踏会」を開催するために彼が作成した、500名を超える招待客リストではないだろうか。

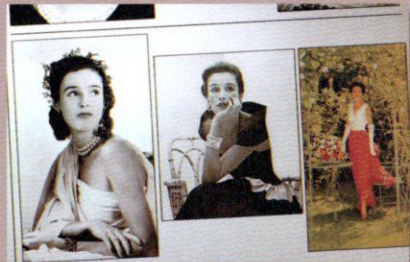
淡々と並べられる名前を眺め、そこから連想される顔や作品を連想してだけで1966年の雰囲気匂いが匂いたってくるばかりではない。ニューヨーク・タイムズでも公開された異例のリストに「選ばれなかった」セレブリティの屈辱感とそれを見せないためのそぶり、その様子を見て面白いカポーティのタランチュラぶり、招待客の当日までの右往左往の準備とそんな気苦労をかけらる感じさせない白鳥の振る舞いなど、当時の社交界にどろどろと渦巻く人間の感情模様が生々しく伝わってくるようだ。

パーティーは参加者だけのものではない。場外の観客がいてこそパーティーの醍醐味が増す。現代のSNSに無遠慮に氾濫する「仲良しで集まりました!」のきらきら写真からも想像できよう。

かつて三島由紀夫はパーティーのマナーとして、「招かれたことを決して口外してはならない」と書いた。招かれるはずと思い込んでい

た人が招かれなかった場合、開催を知ったらショックを受け、下手をすると恨みを買っておそれがあるからである。しかし、完全に秘密が守られてしまうと、実は「選ばれた」参加者が面白くない。「選ばれた」ことがちらっとでも外に知られることで、虚栄心をくすぐられるのだ。だからこそ、パーティーは人選がものをいう。カポーティが3か月もかけてリストを作成したのは、内外へのその効果を知り尽くしているからであろう。しかも彼は、リストをニューヨーク・タイムズに公開することを許すという大胆不敵なやり方に出た。これによって、「選ばれた」人々の虚栄心はこの上なく満たされ、「選ばれなかった」人々は「招かれたけれど断った」という取り繕いの余地を封じられ、屈辱感を耐え忍ぶことを余儀なくされた。結果、ニューヨークのプラザホテルで開かれたこの一大パーティーは同時代人々のさまざまな感情を刺激し、20世紀アメリカの社会史的な事件になった。

これはカポーティによる一種のリベンジにも見える。田舎から出てきた小柄なゲイの男による、自分をもてはやしつつ小ばかにしている(と彼が思いこんでいる)社交界へのリベンジ。上



流階級に入りたくて叶わず、自殺した母に代わる社交界への100倍返しのリベンジ。このパーティーが「成功」することで、リベンジは一見、成し遂げられたかに見えた。

ところで、「黒と白の舞踏会」でもひととき強い存在感を發揮する「スワン」とは何者なのか？ 彼女たちが泳ぎまわる社交界とはどのようなところなのか？

カポーティがスワンと呼んだ社交界美女は、60年代アメリカのファッション文化を語る時には欠かせない存在である。磨き上げられた美貌と最先端の装い、特別な生まれ、それがなくなるときには結婚によって手に入れた特権的な社会的ステイタスを武器に、同時代のファッションリーダーとして注目を浴びるとともに、社交界の重要人物として君臨した。立ち居振る舞いは優雅だが、水面下では壮絶な努力をしているので、白鳥にたとえられた。

白鳥のなかの白鳥である社交界の女王は、バーバラ〈ベイブ〉ペイリー。夫はCBSの会長ウィリアム・ペイリーである。彼女がライバル視したグロリア・ギネスは、メキシコの貧しい家に生まれたが、イギリスの富豪ロエル・ギネスと結婚することで社交界の花形となった。そんな風に結婚によって社会的ステイタスを上昇させることを「マリー・アップ(marry up)」というが、スワンのひとりスリム・キースはその典型で、3度の結婚によってステップアップしている。一方、生まれのよすぎるグロリア・ヴァンダービルトのようなスワンもいる。鉄道王コーネリア

ス・ヴァンダービルトの玄孫である。彼女は逆に、自分の養育権をめぐって母と伯母が裁判で争ったという「かわいそうな大富豪の娘」のレットルから自分を解放しようともがいていた。

それぞれに強烈な個性をもったスワンたちの背後には、必ず政治・経済・メディア界の大物がいた。富も社会的地位もない若い野心家が、才能や面白さを武器として世に出ていこうとすると、社交界の洗礼を受けることがある。表舞台での活躍に値する人物なのかどうか、暗黙のうちに試されるというわけである。面白ければ、背後の大物にアクセスでき、退屈であれば、あるいは信用できなければ、門前払いされる。スワンたちは、そんな才能のふりかけにも大きな影響力を及ぼした。カポーティがかくも大きな名声を得ることができたのは、もちろん文才によることも大きいのだが、それ以上に、同類ばかりの社交界に痛烈な風穴をあけ、毒気をまぶした自己演出によってスワンたちを面白がらせ、彼女たちに脚光を当てることで信頼を受け、支援してもらったことが大きい。

スワンたちもまた、カポーティに救われている。世間からは羨望を受ける人生を享受していても、その内実はときに哀しく虚無で孤独だった。それを忘れるために、あるいは乗り越えるために、水面下で壮絶な努力を続けている。そんな辛さを共有し、吐露できるのは、天才でゲイのアウトサイダーだけだった。真実の姿での素朴な幸福よりも虚飾の世界での栄光を求め続けた複雑なスワンとカポーティは、

ある意味、同族だったのかもしれない。

そんな両者のあやうい蜜月のバランスが崩れる時がくる。

調子に乗りすぎたのか、あるいは意図的だったのか、「黒と白の舞踏会」の成功で気を良くしたカポーティは、やりすぎた。アウトサイダーである自分にだけ打ち明けられた、スワンたちの秘密や夫婦関係の内実を、『叶えられた祈り』という「作品」の一部として暴露してしまった。スワンたちにとってみれば、パーティーのことは漏らしてほしいけれど、婚外恋愛関係となれば秘密は墓場まで持っていきたい。カポーティの暴露によって傷ついた女性の一人は自殺し、何組かの夫婦が離婚した。それまで彼を引き立てていたスワンたちは、彼とはもはや口もきこうとせず、カポーティは社交界から追放されて、孤独のうちにアルコールや薬物とともに過ごして還暦も迎えないうちに亡くなった。スワンがまぶした砂糖にどっぷり漬かり、正しい視力を失った毒蜘蛛が、自ら張った巣に自ら進んでからめとられていくような自滅のイメージが思い浮かんだ。振り返ってみれば、「黒と白の舞踏会」の成功が命を縮める契機になったと言えなくもない。

水面下でいかなる犠牲を払おうともスワンたろうとする人、周囲の感情をざわつかせることで存在感を發揮しようとする人は、SNS時代の今日、かえって増えているように見受けられる。スワンとカポーティの物語は、決して過去のものではない。

Essay

